

追手門学院大学
心理学部紀要第15巻抜刷
2021年3月1日発行

資 料

スーザン・ローランド著
ユング：フェミニスト改訂版(7)^{訳注1)}

第6章、6章注、訳注（下）

翻訳 中村このゆ*

Chapter Six, Its notes and Translator's note
of *Jung A Feminist Revision* (7) (Later Part)
by Susan Rowland

Translation by Konoyu NAKAMURA

資 料

スーザン・ローランド著
ユング：フェミニスト改訂版(7) ^{訳注1)}

第6章、6章注、訳注（下）

翻訳 中村このゆ*

Chapter Six, Its notes and Translator's note
of *Jung A Feminist Revision* (7) (Later Part)
by Susan Rowland

Translation by Konoyu NAKAMURA

第6章 ポストモダンのユングアンフェミニズム（下）^{〔訳注1〕}

フェミニズム、ポストモダン主義とユング

フェミニズムは啓蒙主義とそのポストモダンの対立物と曖昧な関係を持っている。一方で、啓蒙主義には、男性性の合理性を女性性の非合理性の上位に置くヒエラルキーに依拠する傾向がある。この傾向はポストモダン時代を促進するためにフェミニズム理論を活気付けてきた。一方で、フェミニズムは、現代世界が受け継いできた解放、自由、自主、平等といった理想の啓蒙主義からなっている。フェミニズムもそれを希求している。ポストモダン主義それ自体がフェミニズムの企図を満たすものではない。この論争は、ポストモダン理論に固執する啓蒙主義の近代性のジェンダーの二元性を見る過程で実証されうるだろう。

ポストモダン主義の諸哲学は、女性性の非合理性をあいかわらず歓迎している。存在し続けるヒエラルキーの逆点は減多にないように見える。その中で、とらえどころがなく、不完全なポストモダンの「真実」という状況に、今や他者としての女性性が、評価され、特権的位置を与えられている。「女性性」は、ベイルに覆われた女性のようにポストモダンの真実なのである。⁽²³⁾ 啓蒙主義からポストモダン主義へ、「真実」には変化した側面がある。男性性理性の所有物から、

*追手門学院大学心理学部

今や他者としての女性性の擁護に位置づけられている。

ポストモダンそれ自体、この非合理で、表現できない「真実」に根本的に依拠しているのかもしれない。しかし、女性性を他者性に引き続き制限することは、政治的、社会的分野での女性の発達をエンパワーすることにならない。女性性を他者と位置付けるポストモダンの古めかしい伝統の維持が、フェミニズムの理論によって、挑戦されないわけがない。

ポストモダンフェミニズムはポストモダンとフェミニズムの両方でなければならない。二つ用語を互いに折り畳むという事ではない。単一のフェミニズム運動に変わって、多様であるが結びついたフェミニズムの産出は、ポストモダン主義の一つの兆候である。それはまた、「ポストモダン」と「フェミニズム」と用語を再考し、両者の関係を再考するという継続した欲求でもある。フェミニズムのポストモダン主義は、自主と自由という啓蒙主義のナラティブの関係と折り合いをつけねばならない。同時に「女性性」の劣等性に超越的に居座る男性性のナラティブともである。

このような啓蒙主義、ポストモダン主義とフェミニズムのこの筋書きの中にこそ、C. G. ユングの居場所がある。クリストファー・ホークはユング心理学を、ポストモダンの社会のための議論として説得力をもって説明している。⁽²⁴⁾ 真実の知識のための基礎としての理性への挑戦に注目し、ユングは現代の啓蒙主義の性質を批判する。ユングにとって、理性は真実の源泉ではないのである。なぜなら、主観性と現実の知識は他者、不可知な無意識に依拠しているからである。歴史、文化そして身体は、意識的な精神の世界の理解に強く影響する。その世界は意識的な認知に影響を与える元型的イメージの鑄造物の中にある。ポストモダン主義では、何物も「真実」にとっての確定された、もしくは確実な基盤を提供しないのである。

同様に、ユングは自分の心理学を「普遍的」真実の中に据えるために、科学的もしくは哲学的グランドナラティブを用いない。ユングが自分の心理学に関して「哲学」を著述する時、知識にとって、哲学が中立的な根拠を提供しようとは決して言わない。むしろ、ユング心理学は個人的神話の範疇に入り込む。というのも、自我に据えられたユングの理性は、自分の他者、優越的で不可知な無意識の介入に依拠しているからである。ユングは理性が「個人的」要因の刈りこまれたものであるというふりを決してしなかった。

ユングの意図は自分の理論を、筆者が「グランドセオリー」と呼ぶ、グランドナラティブに構造づけようとするものである。従って、それは個人的神話への欲求から完全に切り離されることは決してない。なぜなら、不可知で無意識的で、最も決定的命題が意味するのは、ユングが、優越的で真実を認知する理性という啓蒙主義の原理を持ちえないという事である。このことから、ユングのポストモダン主義への親和性は、ユングの無意識という基本的命題と逆説的に存在すると言えるだろう。ユング派の理論無意識に依拠している（その形而上学的残余物については、第五章を参照）。そのことは、表現不能であり、記述不能である。なぜならそれは自我の創造をはるかに超えるからである。もしも、生み出された存在が、叙述の中では産出されない存在であ

るならば、ユングにとって、ポストモダン主義のように、言語は、真実とこの世界の意味にとって、信頼できる透明な窓ではないのである。

まさに、筆者が前述したように、ユングは完全な意味でポストモダンではない。自分のグランドセオリーへの欲求で、ユングは啓蒙主義的グランドナラティブと関係づけることと、模倣するという両方を望むのである。フェミニズムの観点から最も重要なことは、ユングが最も深く、啓蒙主義のジェンダーに関して反対の考えを保持する男性であることだ。実際、ユング派の考えで表現される対立する思考によって、ジェンダーが原則の手段となる。個性化の本質的に脱構築的プロセスを、ユングの典型的なジェンダーの考えなしに、どのようにして、意識と無意識間の反対物を表現しうるか、想像することもできない。

たぶん、前章で筆者がユングのファリックアニマと呼んだものが、啓蒙主義的現代のユングの成果である。同時に、極めて脱構築的「女性的」無意識はポストモダンのユングによるものである。他のポストモダン主義同様、それは他者をまだ女性性として追い求めている。ユングのアニマに関する叙述は「ファリック」である。それらの叙述が、アニマを単にスクリーンとして説明する。そのスクリーンには、合理性とロゴスと結びつくために男性的意識から追い出されたに違いないものが、投影される。ここに、男性性が有する（男性にとっての「彼の」他者）という意味であるが、男性性になるはずがない（女性が男性にとって、彼のアニマに「なる」）可知的なものにとって、このアニマはその重要な記号表現（シニフィアン）となるのである。そのため、このアニマは、女性性の誤った表現であり、男性性－意識－ロゴス／女性性－無意識－エロスという：二元的構造を形作る手段となる。

ファリックアニマは啓蒙主義的ユングである。そこでは不可知な無意識の記号表現としてのユングのアニマは、ポストモダンのユングの具現化なのである。ポストモダン主義からユングを取り去ることは、ユングをポストモダンフェミニズムの協力者とすることである。ユング派の身体に再び論を戻そう。

ユングとポストモダン主義の身体

ポストモダン主義の身体に関する考えは、四つの側面を有している。

1. 身体は精神に対して二元的で排他的な関係にない。
2. 従って身体は、意識的セルフ、理性、ジェンダー、こころ等の人間の感覚の中の要素である。
3. 身体はディスコースを通して構築される。身体は中立もしくは研究の客観的対象ではない。身体は、歴史と文化と結びついた考えによって構成される。
4. 身体は理性にとっての一つの選択肢ではない。身体は、歴史、こころと文化を超越したものではないので、それ自身で知識と真実のための客観的基礎を提供することはできない。

ポストモダンのフェミニズムでは、『ジェンダー・トラブル』と『身体は重要だ』でジュディス・バトラーが、ジェンダーの形成と心的アイデンティティの中で、性化された身体の役割を検討してきた。特に文化的ジェンダーから身体的性を分割するフェミニズムの伝統を、バトラーは批判する。身体的性を文化的ジェンダーの上に立つ中立的な背景とみなすこの態度が、構築され、刻み込まれたものだ。バトラーは、性／ジェンダーという二元性を、性は中立的に決して「知られた」ものではないという主張によって、脱構築される。むしろ、身体的性は、フーコー派の意味ではディスコースを通して構成される言説的意識（discursive）である。

このことは、身体が単に議論であるという意味ではない。身体の重要さ（matter）には二つの意味がある：筆者の理解では手法を形成する議論の手段ではあるもの、二つの意味は重要である。また、それらは重要さの部分でもあり、意識に上るものを超える身体的存在を有している。バトラーにとって、身体とは、社会的産物と社会的領域に関係づけられた、現実の唯物論的概念である。身体は議論をとおしてのみ可知的なものであるが：それにも拘わらず論証を超えて存在するのだ。

バトラーは、言説的意識と非－言説的意識の身体を、社会的現実という唯物論的観点の連続体に位置づける：「言語（ディスコースを形作る）と物質は反対ではない。というのも言語はその両者であり、物質とされるものに言及する。そして、物質とされたものは、記号内容（シニフィエ）とされたものによって、そのプロセスから決して逃れられない。⁽²⁵⁾ 身体の言説的性化をアイデンティティ形成の中心部に据えることで、バトラーはジェンダーを言語学でいう遂行態^{〔訳注2〕}だというのである。これが意味するのは、ジェンダーに先行する、ある「私（an I）」、あるセルフ（a self）はなく、何かがある性役割をとるように決めるのである。反対に、「私（I）」、そのセルフ（the self）は性をジェンダーに置き換える身体というディスコースを通して構築される。

実際、性とジェンダーに分け目はない。ジェンダー化の種々のディスコースは、身体の繰り返しの引用によって、性の効果を産みだす。また身体は、ジェンダーの関係の中に置かれる（また、ジェンダーの関係で構成される）。従来の仮定を反転させるのに、社会は二つのジェンダーを持たない。なぜなら、自明の二つの異なった人間の身体の種類があるからだ。むしろ、ジェンダーについて考える時、頑迷な二元性が、二つの絶対的に異なった身体のタイプを構築する。それは二元的不平等を保持したいという欲求を正当化するためである。

さらに、このことは、子どもを育てる上で、単一の外的力がかかることは、問題にならない。繰り返しの言及と引用によって、物質としての身体の構築である。身体的重要性は、単純で表面的なものではない。それは「われわれが重要とよぶ境界、不変性と表面の効果を産みだすために、時間とともに安定させることを具現化するプロセスである。」⁽²⁶⁾

バトラーにとって特に問題となること。そこでバトラーの散漫な身体が、フェミニズムのポストモダンの企てをはっきりと引き受けるものは、規制する実践としてのバトラーのジェンダー

観である。ジェンダーは遂行態（本質的な「真実」ではなく）であり、反復である。ジェンダーはその「私 (I)」を構成する。そのため、選択する主語はない。ジェンダーの境界を定めることと主体性は、一つの異性愛の規範を産みだすディスコースの生まれながらの構造である。異性愛は、主体性と性関係にとって規範と望ましい基礎とみなされた時、主導的で、支配となる。

しかしながら、性-ジェンダーのディスコースは、固定し安定的な人間の条件として、異性愛を単純に再生産できるものではない。ジェンダーディスコースは遂行的であり、反復であるので、それらはまだ存在しない「完全」なモデルには役に立たない。その結果、遂行的ジェンダーは、必ず異性愛の規範の中に溝と亀裂を産みだす。これらのディスコースは静的条件下で働いてないので、これらの溝は広がってゆく。これらの溝は、他の競合する考えと社会的実践との衝突として機能する。⁽²⁷⁾

従って、遂行性は、自動力のない身体に、同じ意味を繰り返す刻印付けではない。一様なジェンダーを産みだす単一の外的「基礎」など無いのである。むしろ、ジェンダーのディスコースの反復的引用は、異性愛としての男性／女性の支配的構築の不安定性を明らかにする。異性愛の再生産をしようとする企てによって、遂行性は、異性愛のディスコースの境界をむき出しにする種々の身体を本当に構築するのだ。

これらの種々の境界は、いくつかの性-ジェンダーを「他者」もしくは「規範」外と指定することによって、形作られるに違いない。異性愛は、いくつかの身体が水準に達していない、異性愛として認識できない、論外ですらあると決めつける。⁽²⁸⁾

バトラーが自分の分析を使うという方法の一例が、唯一の優先的記号内容としてのファルスであるというラカンの考えへの挑戦である。これは女性性は表現不能というラカン派の考えの結果である。この方法で、例えば、レズビアン性の愛は、定義によれば、思考不能となる。バトラーが示唆するように、「レズビアン性のファルス」を考えない限りは。⁽²⁹⁾ バトラーはラカン派のファルスを男性性／女性性というその二元的反対物から除去する。男性の身体の不安を、依然として唯一の特権的ファルスという全くの意識的言説に割り当てるという事への挑戦によってである。そうして、このことは、ファルスは他の体の多様な部分に移し替えられるかもしれないと示唆する。というのも、不安心は何も男根の喪失の恐怖に限られる必要はないからである。

ファルスは一つの記号表現としては残る。しかし、ファルスはもはや異性愛の男性性の特権ではない。また、ファルスは記号表現可能な組織の唯一の意味も失う。レズビアンと取り換えるなら、他者の中の単なる一つの記号表現、ファルスは元となる記号表現でも表現不能な外部の物でもない。⁽³⁰⁾

ラカンが、惨めに抑圧された女性の身体に依拠するところで、バトラーはポストモダンフェミニズムの姿勢をとる。そこでは、身体的ディスコースは構成的であり、決して基礎的なものではない。女性の身体は、女性の欲求を表現可能な身体であると主張するために、脱構築に浸透可能なのである。

ユング、身体、そしてジュディス・バトラーの業績

ユングとバトラーの業績の似たところや一致するところを見つけるためには、この二つの理論が完全に一致するかもしれないと考えるのは誤りである。もう少しましなのは、ポストモダンのユング派のフェミニズムへの影響力を見つけ出すために、ジェンダーと身体に関する二つの全くことなく哲学的出発点を比較し、対比する見方であろう。

ユング心理学にはディスコースの一つの理論がない、さらに力関係の結果を産み出すという唯物論に基礎をおいてない。ユングの業績にこのような考えが無いにも拘わらず、絶対的非互換性と全く同じというわけではない。元型的イメージがある個人の文化と歴史に影響されるという事を考慮すると、主体性を研ぎ澄ます物質的ディスコースにとって、ユング派のこのところの中の溝が広がる。

ユングと、文化的ディスコースの役割に特権を与える諸理論の間の決定的でそれ以上単純化できない違いが残っている。それは、ユングにとって、不可知な無意識が自律的介入的要因だからだ。このような「形而上学的」無意識の自立はバトラーの世界では全くのよそ者である。

しかしながら、この小さからぬ違いは、もし、バトラーのディスコースの不安定さというポストモダンの意義を、次にユングの脱構築的無意識に当てはめれば、そう大きなものには見えない。二つの理論にとって、ここらについて「分かっている」のは、不安定で暫定的なものだという事である。ユングにとっては、それは無意識が至上の現実で、知りえない「基礎」であるからだ。意識的な自己が「知っている」もしくは本当だと信じていることは、無意識的他者によって絶えず削りとされる。一方、バトラーにとって、意識的存在は不安定である。なぜなら、ジェンダーのディスコースは異性愛を、浅ましい他の物を作り出すことなしに、固定しえないからである。

ユングとバトラーの間には明確な違いが貫かれている。フェミニズムは、そのルーツをポストマルクス主義の唯物論に持つ。ユング理論は無意識の超越的知識に根差している。この両者は共に「形而上学的」である（本章の序論参照）。バトラーの考えをユングにまだ適応することができるかもしれない。そして、ユング心理学が、それ自身を産む「他者」に依拠し、もう一つのジェンダー化のディスコースであるといえるかもしれない。ユング派の理論は、不可知の無意識を産出し、その基礎に依拠している。そのため、ユング理論は、異性愛に対する偏見をもち続けているジェンダーの対立物を補強するかもしれない。

さらに好都合なのは、バトラー派の観点が、貧弱な女性性としてのファリックアニマだという点である。女性性はユング心理学では、持続的な交渉と再構築のための境界として働く。そのため、ユングの女性性は、バトラーの、女性性を逸脱し、怪しげなものとする議論を放逐する力強い批判的ディスコースの手法として届く。バトラーはユングの女性蔑視に対して価値ある視点を提供するのである。

しかしながら、皮肉なことに一つのディコース（バトラーのような）を「より高次な真実」と

して、他のもう一つのディスコース（ユングのような）を改造するために取り上げるのは、適正なポストモダンとは言えない。それよりもこの議論がこれら二人の思索者によって可能になることである。事実、ユングは、こころの中の反対物が個性化のために結合することという主張を熱心に試みている。ユングはジェンダーを取り上げ、そうするために女性性を卑しめたのである。

それにも拘わらず、バトラーが援用した精神分析の伝統とは違って、ユング派の主体性は他者の関係において「欠如」（去勢不安）に依拠しない。むしろ、ユング派のこころは多様で、目的論的結合のうえに構築されている。完璧な結合の無意識の要求によって、自我は脱構築的無意識に終始身近な親密さを発展させる。ここに、解剖学的反対物のジェンダーは必然的に崩壊する。個性化は、必ずしも反対物として構成されず補償に依拠する。無意識はいつも、自我を構成するディスコースに過剰なものを産出する。したがって、ユング派の象徴的なものは、無意識のプロセスにより親和的に関わりを持ち、より流動的なジェンダー化である。そのため、男性性の記号表現である。ファルスに支配されない。

重要なのは、ユング派の象徴的なものが、諸元型が身体的次元を有しているので、身体にも結び付いている。ユング派のサトルボディはこころの中に、策定されている：サトルボディは種々の元型の直感的でヌーメニク側面から作り出されている。それと、個人の文化的経験（人々がバトラーの用語でいえばディスコースにさらされている）から作りだされる。

ユングとバトラーが同じテーブルにつき、同意するというのは不可能である。が、バトラーのフェミニズムのポストモダンの散漫な身体とユング派のサトルボディには明らかな類似がある。この類似は、ユングのサトルボディのポストモダンの側面にとって強力である。これらの側面は、身体、文化、超越的元型、ユング派の理論そのもの、確実な状況、意味と知識の普遍的基礎を許すことの拒否の中に内在する。ユングのサトルボディは心的、文化的構造の脱構築的ウェブの中で起こる。

勿論、ユングが他者性を純粋な反対物として、身体的形成やジェンダーの決まり文句を使うと、ユング派の身体はバトラーのポストモダンの身体から最も遠くなる。啓蒙主義／グランドセオリー、ユングのアニマ／アニムスとエロス／ロゴスといった、ジェンダー化された二元性はポストモダンフェミニズムに何ももたらさない。

ユングの著述の中でポストモダンのフェミニズム身体にとって、最も示唆的な可能性があるのは錬金術的サトルボディである。これは、ジェンダーの反対物へのグランドセオリーの欲求は錬金術のテキストにはないといっているわけではない。一例として、（ユングによれば）女性の意識がより散漫な「月」であり、その本質はただ女性には家庭を維持しなければならないとユングが正当化しているのだ！⁽³¹⁾

しかし、錬金術に関する著作で、ユングはバトラーが望むものをまきに行っているのだ。ユングは卑しい排除された身体を、異性愛の境界を構成する物であることを明らかにするために、見直すべきだと自問している。卑しいという事は、異性愛的結合、聖婚の構築の外に置かれてきた

が、擁護され、含まれるべきである。自己と他者の間の境界を引き直すための、卑しいという事の継続的再構築は、ユングの錬金術では喫緊である。なぜなら、個性化するところは、ふたつのジェンダーの聖婚の異性愛モデルに基づいては有りえないからだ。心的結合は身体と言説的意識の世界で進み、包含されるべきだからだ。

そのため、錬金術のテキストに以下の事があるのは驚くに当たらない。すなわち、卑しいとされる身体、動物や近親姦など、普通異性愛の規範から除外される心的イメージを取り上げるものである。バトラーが示すように、異性愛はこのような排除によってのみ構築され、表現されうる。このことはユングにとって真実であるかどうかラカンのような心理学にとっても真実だ。

ユングは、ユング全体の業績と特に錬金術に関する業績でフェミニズム的価値を明らかにしている。そこでは、異性愛的反対物の限界を再認識がなされる。排除され、卑しい身体として見なされたものを、中に入れて再構成されるべきだというのである。錬金術の多様なところの結合は、ジェンダー、身体と外部の現実と結びついた相互依存的なウェブの中の主体性を目指す。単純な異性愛の反対物は、錬金術の目標ではない；ユングの錬金術は社会的ディスコースを排除できない。というのもどこであれ自我が存在するところに必ず存在するからである。

ユング派の錬金術のサトルボディ、そこでユングが中立的ジェンダー反対物主義から、ポストモダンのフェミニズムに有効な身体を超えるものになった。バトラーの性化された遂行するジェンダーとの類似が、最も注目し値する。ユングの錬金術に関する叙述は、卑しい身体を見直すところの文法を提供する：たとえば、ユングが卑しい女性性として龍を話題にするとき、それらは同時に、変幻自在で、移ろいやすい心的イメージ、変容への準備が明らかにされる。ジェンダー、主体性と身体は持続的な心的再構築の問題である。そこでは、社会的ディスコースは決して制限、凍結されてはならない。

ジェンダーとポストモダンの崇高さ

ポストモダン主義者は、超越的理由によって性格づけられた、安定した人間の自己を覆すという厳しい選択に直面している。彼らはどちらかの選択が可能である。ポストモダン主義の部分的、断片的意識を追い求めるか、⁽³²⁾ もしくは啓蒙主義が、表現不能な非合理的他者を熟考するためにグラグラしていることに注意を向けなおすことである。

非合理性への焦点は、ポストモダン主義の実現によって正当化される。その実現は、この軽んじられた、「女性的」範囲に今や知識と種々の真実が依拠しているという事である。非合理と表現不能なものに目を向けることが、崇高さへの考察を喚起する。

男性的理性／女性的非合理性という啓蒙主義のヒエラルキーとポストモダン主義の断片的自己対女性的非合理と脆い「真実」の間には連続があるように、崇高さにも多くの物がありすぎる。ポストモダンの崇高さの展望は、啓蒙主義とロマン主義の時代に述べられた崇高さを利用して

啓蒙主義の確実性を遮って、ロマン主義の崇高さは、認識されえたものとイメージされ、表現されえたものの違いへの痛みと悲哀を語る。崇高さとは、表現するために理性、意識、審美的、哲学的範疇の有効性を打ち破るものである。それは、真実を表現するか確実にする資源の理性と言語への啓蒙主義的信頼とは、全く正反対である。

宗教がすでに与える概念的な思考（たとえば神の概念）の中にロマン主義的崇高さの充満や存在の意義がある。が、すべての可能な次元で完全に想像されてはいない。また、宗教は著書や芸術で完全に表現もされない。

もしも聖性に結び付けられるなら、崇高さが男性性にジェンダー化された「他者」というのは、驚くに当たらない。反対にうまくいった審美的表現、「美しさ」の範疇は、小さく、女性的である。⁽³³⁾たとえば宗教のような、「大きく」重要な概念を合理性の適応外に置くことで、崇高さは啓蒙主義の想定に挑戦することになる。勿論、どんな挑戦も女性性を劣等性を表すものとして用いる議論に広められない。

ポストモダンの崇高さは、ロマン主義の、言語と芸術の限界をむき出しにする性質を共有している：同様にこの崇高さは、表象しえないものを表現または賦活する意図の中に存在する。ロマン主義の「聖性」の存在意義を欠くことで、ポストモダン主義の崇高さは、断片化した現代の自己の失敗に見いだされる。その自己は、安定した存在として、真実やそれ自体を構成する物である。

この崇高さは「意識を解体する物、意識を廃棄する物であり、意識が構成しえない物、それどころか意識がそれ自体を構成するために忘れるものである」。⁽³⁴⁾

グランドナラティブの弱体化の結果、崇高さは種々の「溝」を残した。その溝は、知識の体系同士の間であり、それらの体系はポストモダンの状態を全体のまとまったものにできていない。ポストモダンの芸術では、その仕事にたけたと言われる芸術家も鑑賞者も居ないのである。⁽³⁵⁾さらに、権威や意味を絶対に支配するという点で意義ある著作者もいない。このようなポストモダンの視点に立てば、理論家たちは著者ではない。彼らの業績は、ポストモダンの真実の「ペイルに覆われた女性」を表現するのに格闘し、失敗するので、崇高なのである。ここに、ユングの影が浮かぶ。それは、もっとも高次の「真実」、不可知な無意識を表現するその不安定さという点で、ユング心理学もまた、ポストモダンの崇高さであると述べたい。

ペイルに覆われた女性を呼び起こすことが、ジェンダーをポストモダンの崇高さにもたらす。ポストモダンの理論家達は、なんとも強烈な現代文化を構成するために、ロマン主義の崇高さをポストモダン主義に改定する。彼らは、後期資本主義（late capitalism）の不安定な影響に特に関心を抱く。ラカンと精神分析の思考者達は、ファルスというもう一つの道筋から崇高さに辿りつく。ラカン派の理論によれば、ファルスは象徴的なものの唯一優越的な記号表現であり、それはまた崇高さを超える境界を糺す。それは、絶対的に抑圧され、表現不能な女性（Woman）のことである。ラカン派はポストモダンの崇高さを女性性のように表現不能なジェンダーに取り入

れる。

勿論、女性の表現は文化と同時に象徴的に、いくどとなく取り扱われている。しかし、それらの女性表現は、はたして女性自身によるものか、それとも男性の欲求のためだろうか？ラカン派の理論は、フェミニズム理論に非常に影響があることを証明してきた。なぜなら、女性が文化の中で対象として表現される手段として構成されるように見えるからだ。もし、女性性が男性性のためのファルス（欲求の対象）に「なる」ことを求めてられているとする。すると、なぜ女性性が、男性性を写す鏡以上の何かとして、表現されないかということの説明となる。

このフェミニズムの行き詰まりに対して、二つの反応がある。一つ目は、象徴的なものの異性愛の男性性の優越性を批難することである。これは、ジュディス・バトラーによるポストモダンの身体の精査であり、ユングによるよりジェンダーの流動的象徴性とユングのポストモダンのフェミニズムに親和的なサトルボディ、によって可能となる。二つ目は、もしも女性性が崇高で表現不能かを見定めるやり方であれば何も提供する物は無い。さて、ポストモダンフェミニズムの崇高さにユングははたして貢献しうるだろうか？

ユング、ジェンダーそしてポストモダンの崇高さ

崇高さの歴史の中で、ユングを読むと、筆者が主張したいのは、ユング心理学がロマン主義の崇高さからポストモダンの崇高さへの変遷を齎したという事である。ユングには、諸元型（とりわけ自己）を、こころの中の聖的存在に写し取るものとして、ヌーメン的なものと宗教的なものに関連付ける傾向がある－これがユングのロマン主義的崇高さの具現化である。一方で、啓蒙主義の合理性、言語と理論の限界を認めること、第一の現実として心的イメージへの注目という啓蒙主義への批判－これらすべてがポストモダンの崇高さの業績を後押しする。

ポストモダンの崇高さと特に響きあうようにユングの著作したものは、ユング理論の核心に表現不能でイメージできないものを持ち込んだことである：すなわち、存在の発見であり、欠損の発見である。ユングと政治指向のポストモダンの両方が、不公平で抑圧的なものとして啓蒙主義の合理性をみなすことを批判する。両者にとって、崇高さによって、意識的精神にとって他者であるものが、価値あるものとして喚起されることである。

ラカン派の崇高さのように、急増するファリックアニマを通してか、構造的に不可知な無意識を女性化するか、どちらにせよ、ユングは表現不能なものを女性化する。また、ラカンのようにフェミニズムへの困難さが、反対物を考える傾向となる。

しかし、ラカンがファルスの男性性に非常に固執するのに対して、ユングは無意識の女性性の本質を、本質的にまたは疑似的な方法で述べることができない。（ファリック）アニマは、女性性の表現を支配するようにはできていない。先にも述べたように、ファリックアニマは、ユングの叙述の中では、女性性の表現を、ユングの考えの意味合いではなく、歪めるのだ。なぜなら、ユングの無意識は流動的にジェンダー化されているからだ。さらに、無意識は、意味を支配する

自我の欲求を妨害する補償的イメージの供給で、ジェンダーの反対物に限定されない。

クリストファー・ホークはユングが超越機能の概念で崇高さを理論化していると説明する。⁽³⁶⁾意識の先入観と無意識のエネルギーの間の衝突が、心的イメージの喚起を齎すかもしれない。これらのイメージは、反対物の「超越」もしくは非合理的なやり方での違いを表現する試みである：そして、自我はこのようなぶつかり合いに「勝利」しない。超越的機能を通して提供される象徴が、最も重要なのは、それらが崇高と考えられるに違いないということだ。これらの象徴は、言葉に縮められることも、自我を満足させるどのようなナラティブにも縮められない。これら心的象徴は、非合理で無意識の中にのみ本当の居場所があるのだ。

このような象徴を単純なナラティブの原因に帰することは、－例えば、宗教的な象徴は、性的トラウマの結果であるといった－無意識の崇高さの癒しの力を剥ぎ取る。ユング派の心理療法では、心的象徴は、その崇高さによって、理論そのものの信条への信頼を超えて、大切に扱われなければならない。逆説的に言えば、ポストモダンの崇高さの中で、ユング派の理論の中と外で同時に作動するという事である。

フェミニズムの観点に立てば、崇高さの考えは、ユングの叙述の、女性と女性性の表現の間の価値ある「溝」を明らかにする。第二章で述べたように、ユングはジェンダーという考えとは協働しなかった。代わりに、ユングにはジェンダーを身体的性に落とし込む傾向があったので、ジェンダーが文化的変化の影響を特に受けやすいとは観ていなかった。この傾向は、特に女性について叙述する際、いつもその著作の前部に顕著である。アニマは女性の表現、すなわちそのファリックな性質を支配することから来るのである。

しかしながら、ユングの女性性の意義深いところは、ファリックアニマの完全な支配下にないところである。なぜなら、それは無意識の崇高さという本質を否定してしまうかもしれないからだ。ユングには二つの女性性がある。一つはアニマによって男性が形作ったもの。もう一つは、男性の理論家を誘惑する魅力的なアニマによって、曖昧になる女性のアニマである。非グランドセオリーのユングである限り、ユングは現実表現の理論と言語の限界に気づいていてもいる。このユングは二つの女性性の間の溝を提供しなければならない。一つの女性性は貶められたもので（男性の優越性を創り出すために男性の意識から排除されたもの）でも一つの女性性は、完全な他者であり、従来表現からわずかではあるかが解放されたものである。

ポストモダンの崇高さのユングは、自分の理論に「いつか最終的な正当性を獲得しようという保証はまったくない。」⁽³⁷⁾ [訳注3] 結果的に、ユングの叙述の中の女性性はユングの文化的偏見に引きずられるかもしれないが、その表現可能性が制限されることは無い。ユングの崇高さの中の女性性は、表現不能な神性もしくは知識を、単にイメージするだけでなく、指し示せるのだ。例えば、錬金術において、ユングは女性性が、男性性に対して力強いイメージを完全に制限するイエスの不能を、あらわすということをはっきり認めるのである。⁽³⁸⁾

崇高さにおけるユングのポストモダン主義は、女性的イメージと記号表現が、説明的というよ

り、可能性とみなされると、フェミニズムにとって一つの好機となる。これが意味するのは、女性性が崇高さの指標になりうるかもしれないという事である。「女性的」という用語は、確実、完全もしくは定義可能ななしに、漂う記号表現となりうるかもしれない。そして、それは文化と政治的変容を新たにするもの、かつて表現された一つの文化の中の女性性の意味を変える物にまでなりうる。しかし、このように発展する意義は、女性性を再創造する余地を阻害する欲求を満たすような、全体的で、完全に満足のいくものには決してならない。

この女性性の意味に先だって制限するもの、これらの意味を変えることに与する、もしくは与しないかもしれない者に割り当てられたものもない。「女性的」という記号表現は、継続的な社会的、政治的、哲学的変容の場所になりうるのだ。⁽³⁹⁾ ユングの崇高な無意識は、このようなフェミニズムのポストモダンの夢に、理論的正当性を提供しうるのだ。

このようなポストモダンの崇高なフェミニズムにおけるユングの役割は、決して圧倒的なものにはなりえない。なぜなら、彼の業績のいたるところに、二元性のジェンダーを構成し、ファリックアニマへのグランドセオリーへの欲求が、刻まれているからである。ポストモダンの崇高さは、ユング理論の中にあり、女性性に自由に開かれている。というのも、ユングの象徴的なものは、ファリックではなく両性具有的であり、フェミニズムの思考への協力可能性を産みだすのである。

この節の価値ある結末は、ラカンの理論の男性的ファルスとユングの「叙述」のなかのファリックアニマの決定的違いを強調することである。ユングの理論では、女性性は、ユング独自の無意識のジェンダーの流動的性格をもつ象徴への平等な接近を持つべきなのだ。ユングの叙述の中の滑り込みが、アニマを内在する「自分」の個人的神話を崩壊させる。最初に、アニマはグランドセオリーのなかのすべての男性のものであり、そして二次的にすべての女性のための心理学なのだ。ユングの業績の中のこの本質主義を避けるためのあがきは、決してユング派の諸概念の反本質主義と混同されてはならない。ユングのポストモダンの崇高さは、「女性的」記号表現の継続的な蘇生のための一つの資源なのだ。

フェミニズムナラティブとしてポストモダンのユング

ポストモダンのフェミニズムにおけるもう一つのユングの役割は、基本的主張のないナラティブである。これは二つのやり方でなされうる。ひとつはユングの考えに、心理学のディスコースという力の主張から移し替えることに拠って、架空の構造を振り当てる事である。もしくは、ユングの業績は地域的、歴史的に左右されるナラティブに作り替えられる。ユングの心理学はグランドセオリーのグランドナラティブの地位を剥奪される。それは、社会的、医学的そしてジェンダーディスコースの特別な組み合わせの創出として再定義されることによってである。この第二の行為の可能性として先の章で提言してきた。それは、ユング派の理論が無邪気な心霊主義と十九世紀後半のオカルト的女性性の概念とははるかに遠いものであると検討してきたことに拠る。ここでは、ユングを一つの架空の文脈のポストモダンのナラティブとして考える事が有用かもしれ

れない。

ユング派のジェンダーのナラティブの既に存在している身体は、第三章で述べたような、ありあまるユンギアン女神フェミニズムの中に見いだされる。これらの著作はそれ自身をポストモダンとは定義していない。それどころか、文化、ジェンダーそして宗教を「説明」として称するグランドナラティブを提唱するために、ユング派の概念を拡充している。それにも拘わらず、ポストモダンのユング派のフェミニズムは、これらの著作を、観念的な創作と実行の練習として「再利用」できるのだ。女神フェミニズムは女性性のナラティブとして機能し、読者（そして分析家と被分析者）に新たな物語の存在を「体験」させる。これらの物語を深遠な心理的レベルで、しかし、それらが創作だという感覚を残しながら、体験することが可能なのだ。

筆者のモデルは、ファンタジー文学である。読者は、それに対して客観的「真実」としてではなく、深い反応を抱く。このような物語は、読者に以下のものを示そうとすることで、フェミニズム的価値がある。それは、父権的宗教的構造と保守的な性役割の外に存在するかもしれない物である。女神フェミニズムは、自覚的な創作として読むことができる。それは、また読むという行動を通して、主観的試みでもある。ポストモダン主義にとって、女神フェミニズムは、心理学のファンタジー文学である。

ここでの、「ファンタジー文学」という用語は、女神フェミニズムの境界線上に存在することを意味する。それは、心理学のフェミニズムのポストモダンへの関心の余白と文学の境界線上である。心理学にとって、「ファンタジー」文学には臨床的な含みがある。ファンタジーは無意識の種々のモチーフである。文学は、それらのモチーフを社会的相互作用の現実と共有されることなしに、一つの「現実」として叙述する。心理学の「ファンタジー文学」は、現実の人間の主体の「個人的神話」の主観という実験的疑問を投げかける。

一方で、「文学」という視点にたてば、ファンタジー文学は、恣意的、非常に観念的な絵空事である。フェミニズムファンタジー文学は、女性と女性性をイメージしようとする試みであり、存在する社会と文学的リアリズムの支配的なジャンルの両方の社会的縛りを超えたものである。世界に接する窓を主張することで、文学的リアリズムは、まったくもって啓蒙主義の産物である。なぜなら、それは言語を、安定的で透明で真実に続く通路とみなす。ファンタジー文学はポストモダンであり、言語は他の世界への視野を、実証的現実の主張なしに、魔法のように得るものとして使われる。ファンタジー文学は、読者に社会的真実をもたらすのではなく、社会とジェンダーに関するフィクションの中で異なったナラティブの体験の機会をもたらすのである。

ポストモダンのユング派のフェミニズムは女神フェミニズムを、文学と心理学の境界の探索として扱っていると提起したい。このようなフェミニズムでは、読むという行為に以下のような注意が必要かもしれない：フィクションを読むという事は、真実という権威を主張するのではなく、ナラティブを通して主観を一旦沈め、再びイメージすることである。実際、フィクションを読むことで、主観がまったく「地についた」ものでないという体験をする。ポストモダンの女神フェ

ミニズムは、意識的自己を遂行する中でのフィクションの効果の一つの研究なのである。

心理学から出現した文学を、心理学的理論とフェミニズムのフィクションの境界を探索する物とみるとしよう。そうすると、それはポストモダンのフェミニズムたり得る。ミシェル・ロバートツ^{〔訳注4〕}の『ワイルドガール』^{〔訳注5〕}と『イン・ザ・レッド・キッチン』^{〔訳注6〕}とマーガレット・アトウッド^{〔訳注7〕}の『またの名をグレイス』^{〔訳注8〕}等の小説は、ユングのグランドセオリーの中の女性性の役割を十分に言及している。これらの小説は、フィクションとして（あらたな基礎的真實を作り上げようとはしないポストモダンの中で）ファリックアニマ、フェミニストの崇高さのユングにとっての可能性そしてポストモダンのナラティブ形式の歴史的文脈を、探索している。⁽⁴⁰⁾

さらなるポストモダンのフェミニズムへのユングの採用として、筆者はユングのゴシックへの関係をここで考えたい。ゴシックとは審美的運動であり、啓蒙主義の合理性の限界を明らかにするためにも用いられる。

ユングの女性性とゴシック

ゴシックは、幽霊、中世の城、邪悪な暴君などの文学であり、十八世紀後半に出現し始めた。ロマン主義の崇高さとどうように、その一部分として、ゴシックは啓蒙主義の理性の強調に注目し、論議する。崇高さとポストモダン主義の中に継続し、修正されている。

特徴的な十八世紀ゴシックの中世のモチーフは、後の世紀、ヴィクトリア朝時代の合理性が備わった場所にも度々ゴシック風の亡霊として登場する。幽霊、奇怪さそして横暴さは、近代都市のジキルとハイドもしくはヨークシャーの荒野のヒースクリフの悩ましい程の残忍さに見いだされる。⁽⁴¹⁾

ポストモダンの魂にとって、ゴシックは今や科学技術の悪夢であり、現代の自己への攻撃である。終わりのない十八世紀の城の迷宮は、多様な非現実のサイバー空間からどうしようもなく逃れられないところに再び現れる。

ゴシックは過剰の文学である。ゴシック文学は啓蒙主義の境界を安んじるものを超えてしまう。その境界とは、理性の外部の非合理性、超自然を排除する自然、ファンタジーを超えるリアリズム、自己対他者、そして二元的に女性性に優越する男性性に置かれていたものである。ゴシック文学は、啓蒙主義の規範を批判する感情の美学、主に恐怖をもたらす。そのみならず、ロマン主義の崇高さのように、ゴシックは啓蒙主義への単なる反対物というわけでもない。ゴシックは非合理性を究極的に回復するための放出口を用意することで、啓蒙主義を補強するのである。理性はゴシックの物語の中で復元を得る。たとえそれらの物語が、ナラティブの内で崩壊をしめす、ぞっとするような効果を与えるとしても。

ゴシックは崇高さによって文化的輪郭を与える。ゴシックは現実的恐怖とぞっとするような嫌悪すべき恐怖の二つの心理的様式をもたらす。「現実的恐怖」は、崇高さの圧力のもと意識的自己を説明する記号表現である。たとえば、ある幽霊の物語の中で自然と超自然の間の境界が蝕

まれる。「ぞっとするような嫌悪すべき恐怖」が意味するのは、たじろぎ、自己の断片化にまで、逆行するような方向である。

ゴシックは、他者を抑圧する啓蒙主義に挑む。しかし、その最後には、ぞっとするような恐怖を放逐することで、すでに存在する規範の復元に役立つ。これは、啓蒙主義社会が、真実の基礎として理性を崇めることによって、生み出された他者を根絶する必要性に関わった、一つの方式であった。ゴシックのこの捨て鉢な突然変異と頑迷さは、啓蒙主義の二元的構造を保持するために求められる継続的效果の一つの症状とみることができ有る。ポストモダン主義では、このゴシックは、断片化した自己ととてつもなく表現不能な科学技術社会でのぞっとするような恐怖の特徴的分野となる。その表れの筆頭がサイバーパンクである。^[訳注9]

それならばこの審美的運動の中でのユングは何か？上記のゴシックの定義によれば、ユングは、ゴシックを説明する理論として、容易だろう。個性化と自我に恐ろしい挑戦を突きつけるシャドウの役割。それは結局のところ他者へのより大きな愛着に組み込まれる。このような概念はゴシックを形作るのに使われてきた。ユングのグランドセオリーは、一貫したゴシックの文学的批判の形を提供し、その最も荒々しい逸脱でさえある。これは、ユング心理学を文学の知識に優先的な形として使う事である。それは必然的にグランドセオリーの様式のユングだけを見ることを伴う。ユングを文学のグランドナラティブとして見ることである。これを正確に行うユング派の文学評論の伝統が存在する。

ふたつの関係ある論点が直ちに明らかになる。自明のこととして、また絶対的に一方が一方に優先するものとして、一つの知識の形式をとるものは、ポストモダンではない。ファンタジー文学が、現代のフェミニズムにとって、文学と心理学の間の相互的關係を示していると言いたいのである。一方を他のもう一つに還元することではないのである。

次に、ユングのみをグランドセオリーとして見るのがゴシックのナラティブになる。これは、ユングの著作の個人的神話の種々の次元をすべて無視することである。これはまた、グランドセオリーが、不可知な無意識という基礎的な概念の中の単一の包括的理論という観念の紛れもなく問題提起していることさえ、無視することになる。

ユングアンフェミニズムにとって、さらに生産的なことは、ユング自身の著作が女性性と幽霊のような出会いに所以していることを思い起こしてほしい。またユング自身の権利で自分をゴシック作家として据えることである。考えてみてほしい。例えば、啓蒙主義の理性の優先を批判するために、ユングは錬金術の中世風のものを利用する。この戦術は、ゴシック小説のなかの中世的構成の役割に類似している。ユングは、合理性への過渡の信頼を批判する中で前向きに進めるため、知的歴史を深く掘り下げる。それは、ゴシックへの徹底的な没頭である。事実、ユングのジェンダーの扱いは、異様なほどゴシック風である。

女性性におけるゴシック作家としてのユング

ゴシックは恐怖とぞっとするような恐怖の形の中で、崇高さを、女性性を非合理性に合わせるジェンダーの境界を解放し、再構成する。このゴシックの特徴により、ユングは三つのやり方でゴシックに加わる。

1. 啓蒙主義的ゴシックによって、ユングが（ファリック）アニマのなかの男性性のために合理性を回復するやり方は、全体的な類型であった。ゴシック小説とユングの著作は、共に男性的理性のヒエラルキーを破壊する。このヒエラルキーは女性性の抑圧から構成されており、ただそれをより薄っぺらい形に再構成するのみである。
2. ユングはポストモダンのゴシックに、ポストモダンの崇高さを通して加わる。ポストモダンの崇高さには、自我に作られた理論にとって限界がある。ユングは、根本的に他者に依存する、ポストモダンの自己表現を提供することで、これを成し遂げる。ユングのポストモダンの崇高さには、異様なまでのゴシック趣味が存在する。それは、ユングの女性性への関係で、最もぞっとするような恐怖の中に、男性的自己と結びつく欲求を汚すものとして横たわっている。この女性的な他者への恐怖は、特に女性の亡霊の催眠状態での再現によって、記号表現されている。
3. 本来のゴシックは、美学と特に文学に属する。自己－意識的な作品の文学的特徴への気づきは、ひとつのゴシック的特徴である。

ユングの著作は少し文学を弄んでいるようにも見えるが、ユングの考えを理解し、「理論」としてそれらの考えを構成することにさえ、不可欠なのだ。個人的神話とグランドセオリーの間の継続的な再調整、最も重要な概念、無意識の不可知性の中核の認識が意味するのは以下の事だ。ユングの心理学は、その崇高なエネルギーを示すために寄与するところの文学という特徴を持つ。ユングの神話の利用は、ナラティブの観念の記号表現である。そこでは、フィクションとしての「物語」もしくは理論的表現が連続体として出会う。実際、文学的構成は、ユングにとって、ユングの世代の中での「個人的神話」として、理論を組み立てる唯一の手段である（第二章参照）。

ジェンダーの問題について、ユングは、ポストモダン主義者というより、一貫したゴシックの著者であるというのが、筆者の結論である。これは、ポストモダン主義、もしくはポストモダンのフェミニズムへのユングの価値を拒否するものではない。むしろ、これは以下のように考えられる。ゴシック小説のナラティブの終止のように、ジェンダーの因習を回復し、再創設するために、ユングは二元論的構造への還元にもいつも帰るのである。

ユングの幽霊物語：ゴシックとしてのユングの一例

人生の後半、超常現象に関する本の序文を書く中で、ユングは自分自身の幽霊の物語を語って

いる。⁽⁴²⁾ ユングは、叙述する出来事が三十年前、イギリスで実際に自分に起こったことだと主張した。⁽⁴³⁾

男性の同僚のX博士と女性の召使と田舎のコテージを借りて滞在中、ユングは眠れなかった。ユングはベッドの中で夜中の恐ろしいが理由のない匂いを確信するようになった。この解けない謎に、ユングはこの臭いは、何年か前に治療した高齢の女性患者の広がった悪性腫瘍にもっとも似ていると結論付けた。

病気の異臭の後には、執拗なボタボタという音に眠りを妨げられた。そのような原因は無いにも拘わらずである。ユングは倦怠感と無気力に悩み始めた。次の週末には、大きなコツコツいう音と犬が寝室の周りを駆け回っている印象が、臭いと滴り落ちる音に交じりあった。同時に、ユングは女性の召使がこのコテージを怖がっていることに気が付き始めた。これで、そのコテージに幽霊がでるという事が信じるに足るものであるとユングの疑念を確実にする。

騒音と臭いは、究極の恐怖にまで高まった。ベッドの中ユングは身を見開き：「枕をしている私のそばに、老女の首が見え、かっと見開いた右目は私を睨みつけた。顔の左半分は目の下から欠けていた。」⁽⁴⁴⁾ [訳注10] 「わたしは一飛びでベッドからはね起き」^[訳注11] 他の寝室に移った。⁽⁴⁵⁾ ユングはそれ以降悩まされることはなかった。しかし、X博士の疑いが晴れた時になって、ユングはこの物語の最後まで話す。コテージに一人で寝ようユングにすすめられ、この話を馬鹿にしていたX博士は同じように不思議な騒音に悩まされる。疑いを渋々ながら認めざるを得ず、そこでの滞在を取りやめる。自分の幽霊への恐怖を笑いものにしたこの同僚の敗北によって、ユングは嬉々として自分のナラティブへの結論を述べている。⁽⁴⁶⁾

ユングのゴシックの一例としてのこの小さな逸話が明らかにするのは、次に続きがあるという事である。ユングは、自分自身の解説を、不自然な出来事を自分の心理学にあうような説明に吸い上げる。すべての出来事は、過剰ではなく「ユング派流」の適切なやり方で入れることができるのだ。ユングは、滴り落ちる音の説明はできない！

従って、この細やかな物語は、その崇高な亡霊が理性の根源に及ばない点でゴシックである。また、理性の子ども、グランドセオリーへの小さな勝利によってゴシックである。滴り落ちる音は、同化できない過剰さとして残るのである。そうであるなら、古典的なゴシックのジャンルのこの幽霊物語を、どうやって心理学の構成に導くというのだろうか？

この幽霊物語を読み解く一つの方法は、ユング派のサトルボディの興味深い一例とみることである。ユングは、臭い、コツコツという音、「犬」を無意識のところが身体の外部の周りの物に描き出すと説明する。異常なまでに敏感な無意識が以下のように感じるのである。すなわち、一旦寝室に入った病人が、それを様々な身体的感覚として顕すのである。無意識が病的な臭い、ユングが言った「無気力」な身体を創り出す。これは、身体的な恐怖への抵抗であり、内的な心臓の鼓動が、寝室の壁を「コツコツとたたく」ように聞こえるのである。また、それは病気を「嗅ぎまわる」イメージとして犬を呼び起こす。そのクライマックスは、創造的無意識が、現実の悪

性腫瘍の患者の不完全な記憶にもとづいた視覚的幻影を産みだす。

このように、ここでは、幽霊屋敷－幽霊物語－のゴシックの話を媒介として、身体を描写するのに利用する。魅惑的なことに、これらすべての現象に確実な根源に帰することが不可能な点である。その根源は身体の中か、潜在的レベルで病人の特殊な臭いを嗅ぎつける身体感覚にあるのだろうか？もしくは、これは、「外国」の環境によるストレスがかかったところが、身体的反応を引き起こしたのだろうか？もっと一般的に、幽霊物語の文学がユングの身体に刻まれたのか、もしくはユングの身体が幽霊物語の分野を引き起こしたのか？

ジェンダーもまたこのゴシック文学の特性がある。ここで、言いたいのは、貶められた女性の身体が、男性的な健康な身体と心を維持するために利用されてきたということである。身体と心が苛まれた中で、ユングは眠れない。さらに、ぞっとするのは、自分だけに現れた、みたところ外部の現象を明確にできないで、自分の正気を確認できなかったということだ。ユングの身体と心両方の病気が、その老婦人の最後の幻の中の女性性としてオカルトになったのである。

そしてユングは、この病気に近い女性性から、ベッドを飛び出し脱出することで、自分の苦痛を打ち破る。ユングは病的な女性の幽霊の横で休むことなく、同じ立場でよこたわろうとしない。

文字通り、ユングは身体の中に飛び込む。しかし、ユングにとってそれは精神的で概念的なものへの飛び込みでもある。なぜなら、ユングの身体とは違う物理的表現の後に、ユングは眠ることができ、またこの多くの幽霊物語を自分自身の理論的範疇に入れることができる。ユングは、ジェンダーの違いを構築するために、自分の身体という手段と、自分の理論の両方に区別を設けた。身体は、ユング理論の用語としてだけで理解されない；身体はその構築にも寄与しているように見える。この幽霊物語の中で、身体は二重の幻影なのだ。ここでの身体とは、理論によって客観としてみられ、またそれは理論を産みだすようにも見えるのだ。

この幽霊物語は、脱構築と、健全な男性理論家対病気の女性患者という二元論の安定でユング自身の回復をもたらす。この意味で、ユングの降霊術の論文を見直すと、ユングの霊媒のいここに関して同じやり方が確立されたといえよう。

ここでの幽霊物語は、ユング派のサトルボディが、女性性を貶めた地位に置く境界を再確認することで男性的権威として、どのように明確にされうかという一例である。貶められるという事は、単に見下げられるだけではない；それはまた、決してその主体がそれ自身の形成においてそれを完全に放棄できない。幻の幽霊の女性の顔の一部は、ユング派の自我のジェンダーのもらさを痛切に示すのである。完全な主体として女性を記述する主人の不能を雄弁に表すのである！

ゴシック物語のように、ユング自身の幽霊物語、自然と超自然、男性性と女性性などは、その境界の浸食と回復の上に成り立っている。物語の中で、女性性とは、病気の患者、幽霊の幻そしてその家が幽霊屋敷だと信じる女性の召使の記憶である。ユングのジェンダーの問題は、以下の二つのものの間に宙ぶらりんになる。一つは、理性による権威とX博士の懐疑であり、もう一つは、他者性を、劣等な地位の女性性として、オカルト風に記号化することである。加えて、ユン

グは外国（イギリス）に滞在しており、そこでは自分も自分の心理学も、自国にいるのではなく、自然もしくは理性的にも受け入れられなかった。

ベッドから飛び出したのは、理論にとびこむという身体的次元である。それは、ユング自身の、そこには参加していないオカルト女性性の男性的理論家という－男性の権威モデルのジェンダーの境界を再構成するのにユングにとって必要なものである。これは、全体的にゴシックのねじれである。そこでは、崇高なカオスが男性の合理性の支配と女性性を非合理／超自然と定義する。X博士の懐疑主義への勝利で終わるというユングの典型的なものであるが、滴り落ちる音という過剰さが残される。一つには、この幽霊物語は、ジュディス・バトラーの議論を非常に正確に描いている。すなわち、その議論とは男性性、主体性と女性的身体を卑しいものとして抑圧の上に成り立つ異性愛についてである。一方で、ユングのゴシックの叙述は、ここでは、啓蒙主義の理性理論にとって代わる。その理論とは、内なるそして外なる女性的他者によって構成された一つの理論によってすべての他者性を追放する（X博士の懐疑論）。しかしまたフェミニズムはユングの滴り落ちる音に感謝できるだろう！

ユング派の理論を組み立て直そうという試みの中で、この音は緩やかな恐怖、限界の兆候、ポストモダンの崇高さの継続する鼓動を表現している。それらは、すべての現象を構成する一つの一貫した配置である。この滴り落ちる音は、虚構の感覚を、ユングのこの幽霊物語という組織の上の男性的勝利の構築の中に持ち込むのである：それは、審美的なものが哲学的－科学に従うのを拒否する。

幽霊物語の審美的形式の最後の有効性は、以下のことを強調することである。すなわち、女性性は最終的には貶められるが、女性性は単一の固定的原因に還元可能なものではないという事である。この女性の幽霊は、何か一つの所為ではない。ユングの疲れた身体、不安なところ、職業的な傷つきやすさ、外国でのよそ者状態、ユングの女性召使との関係のどれか一つというわけではない。可能な説明は、多様で幻のようなものを残し、ユングの理論的考えを持ち込むことに拠って、それらを傘の下に入れる余地さえ残す。その理論の中の異質のもの（滴り落ちる音）、女性性の他者性の固定的できなさの両方は、無意識の不可知性と無限さが良く現れるということだ。この物語が教えるのは、ファリックアニマ（貶められた年老いた女性）は、一つの虚構でもあり、ユングの女性性が崇高でもあるということだ。

グランドセオリーを美学的なゴシックに適応することで、ユングは女性性の崇高さへの言説的意識の場を開拓する。ただゴシックを投入することで、ユングはジェンダーの意味を手の届く存在と可能性の流れを遮る議論をこえたところに据える。ゴシックの審美的形式は、すべてのユングの幽霊に相応しい「ファンタジック」で居心地の良い場所を提供するのである。

ポストモダンのユングアンフェミニズム：

エコフェミニズムとサイバーフェミニズムにかんする覚書

複数のフェミニズムの時代に、ユングはポストモダンのフェミニズムに貢献している。ユングの業績は、ポストモダンの身体、ポストモダンのナラティブ、崇高さとゴシックにフェミニストの注意を向けるという点で援助を可能にする。

エコフェミニズム（自然との関係を強調する）とサイバーフェミニズム（科学技術との接点に関心を払う）は二つの運動である。それらは、二十一世紀の危機にある生態学的環境とコンピュータに支配されている中で共に重要である。第三章で述べられた伝統的ユングアンフェミニズムは、すでにエコフェミニズムの主要な柱である。

サイバーフェミニズムはいわゆる自然な非文化的身体とポストモダン時代の安定した自己の喪失をもたらす。このため、ポストモダン主義の誰もがサイボーグである。なぜなら、身体と主体性がとりとめなく脱構築されるからだ。サイバーフェミニストは、不平等なジェンダーを元に戻そうとし、ポストモダン社会の中の政治的変容に対して働きかける。

ユングがポストモダンのフェミニズムの崇高さを提供する限り、サイバーフェミニズムの上にユングの影をおとすかみしらず、またサイバー領域にユングの女性的亡霊を送るかもしれない。

まとめ

ユングの無意識の定義は、ある意味でユングの業績をポストモダン主義にかえる啓蒙主義の理性への挑戦である。しかしながら、ユングが存在するジェンダーは少なくともポストモダンなのだ。そこで、男性性を合理性、女性性を不合理にそろえる啓蒙主義の反対物の構造という特徴にしがみつ়くことをユングは欲している。

二元的態勢へのグランドセオリーへの意欲にも拘わらず、ユングの反対物の考えは、ジェンダーに対する姿勢だけではない。不可知な無意識という概念の発見の効果は、客観的権威を持ついかなる理論的提案の主張をも退ける点で、決定的である。結果的に、その理論の中には、身体、ナラティブそして崇高さのためのポストモダンのユングアンフェミニズムの議論をするための隙間がある。

「個人的神話」はフェミニズムのポストモダンの運動に、その理論の限界を知ること、親和的なものになる。「グランドセオリー」はユングの啓蒙主義的外套である。それは、フェミニズムのポストモダン主義に静かに参加している。もしも、グランドセオリーが不可知で、崇高な無意識にジェンダーの确实性を脱構築させるように、構成されるならば。

フェミニズムの観点に立てば、グランドセオリーはユングをポストモダンの著者より、ゴシックの著者を説明する方がより正確である。それは、グランドセオリー／個人的神話が複雑に織混ぜられているからである。これら、二つの相互作用は関わり合うが、以下の欲求へ衝動をはっきりと表現している。すなわち、まず不合理でオカルトとしての女性性を擁護し、そして男性的理

論家の役割をしっかりと支えるのである。

更なる学習のための文献

ユング派の錬金術

Schwartz-Salant, Nathan (ed.) *Jung on Alchemy* (London: Routledge, 1995) ユングの業績を学術的に紹介し、テーマ別に整理した論集。

ポストモダン主義、フェミニズムとユング

Barry, Peter, *Beginning Theory: An Introduction to Literary and Cultural Theory* (Manchester and New York: Manchester University Press, 1995).

ポストモダン主義の本当の初学者にとって、Barryの章は有効な出発点となる。

Docherty, Thomas (ed.), *Postmodernism: A Reader* (London: Harvester Wheatsheaf, 1993).

意欲的で幅広い論集だが、気弱な人向きではない。崇高さに関するLyotard とフェミニズムに関する深い節を含む。

Hauke, Christopher, *Jung and the Postmodern: The Interpretation of Realities* (London: Routledge, 2000).

この話題でこれぞという一冊。ジェンダーに関するユングのポストモダンの限界について良い。強くお勧めする。

Kemp, Sandra, and Squires, Judith, *Feminism: A Reader* (Oxford Readers; Oxford: Oxford University Press, 1977).

1980年から1997年までに出版されたフェミニズムの著作から抜き出した欠けがえのない論集。ポストモダン主義とフェミニズムに強力。

ポストモダンの身体

Butler, Judith, *Bodies that Matter: On the Discursive Limits of Sex* (London: Routledge, 1993).

読むのは決して楽ではないが、フロイト、ラカン、フーコーの理論的基礎を知っている読者には辛抱して読む価値はある。フェミニズム理論に非常に影響を与えている。

ユングと崇高さ

Hauke, Christopher, 'The Phallus, Alchemy and Christ: Jungian Analysis and the Sublime', in Petruska Clarkson(ed.), *On the Sublime in Psychoanalysis, Archetypal Psychology and Psychotherapy* (London: Whurr Publishers Ltd, 1997), pp.123-44.

臨床的な観点から親しみやすく明快に論じた評論。ただ、崇高さのフェミニズム的意味合いは、ここではHauke のテーマではない。

ゴシックについて

Botting, Fred, *Gothic* (London: Routledge, 1996).

ユングについての言及はないが、このテーマについて入門的で考えを賦活する紹介である。

Jung, C. G., *Psychology and the Occult* (Ark Paperbacks; London: Routledge, 1982), は 'Foreword to Moser, On Spooks: Heresy or Truth?', pp. 143-52.

ユングの幽霊物語。ジェンダーの構造に魅了されていることを明らかにしている。

原注第6章(下) ポストモダンのユングアンフェミニズム

- 23) Patricia Waugh, *Stalemates?* : 'Feminists, Postmodernists and Unfinished Issues in Modern Aesthetics', in Philip Rice and Patricia Waugh(eds), *Modern Literary Theory: A Reader, 3rd.edn* (London: Arnold, 1989, 1992), pp. 322-40, と Alice Jardine, 'The Demise of Experience: Fiction as Stranger than Truth?', in Thomas Docherty (ed.) *Postmodernism: A reader* (London: Harvester Wheatsheaf, 1993), pp.433-42.
- 24) Hauke の *Jung and the postmodern* を参照。
- 25) Butler の *Bodies that Matter*, p.68
- 26) 同上, p.9.
- 27) 同上, p.10.
- 28) 同上, p.15.
- 29) Butler, 'Lesbian Phallus and the Morphological Imaginary', 同上, pp.57-91.
- 30) 同上, p.87.
- 31) CW 14, p.180.
- 32) スキゾフレニックポストモダンの自己については, Fredric Jameson, *Post-modernism, or, the Cultural Logic of Late Capitalism* (London: Verso, 1991), pp. 1-54.
- 33) 小さな「女性性」対男性性というロマン主義の崇高さについては, Edmund Burke, *A Philosophical Enquiry into the Origins of our Ideas of the Sublime and the Beautiful* (1757), Botting, *Gothic*, p. 39より引用を参照。
- 34) Jean-Francois Lyotard, 'The Sublime and the Avant-Garde', in Docherty (ed.), *Postmodernism: A Reader*, pp.244-56, at p.250.
- 35) 同上, p.249.
- 36) Christopher Hauke, 'The Phallus, Alchemy and Christ: Jungian Analysis and the Sublime', in Petruska Clarkson (ed.), *On the Sublime in Psychoanalysis, Archetypal Psychology and Psychotherapy* (London: Whurr Publishers Ltd, 1997), pp.123-44, at p.128.
- 37) CW14, p.551.
- 38) 同上, p.379.
- 39) 筆者の意図は、女性的崇高さを先鋭的な政治的変容の場所にすることである。この考えは、Slavoj Ziek の *The Sublime Object of Ideology* (London: Verso, 1989) [スラヴォイ・ジェジェク著, 鈴木晶 (訳), (2015) イデオロギーの崇高な対象, 河出書房新書] に負うところが大きい。*Bodies that Matter*のJudith Butler はZiekの業績をジェンダーに関するフェミニズムの展開より乏しいと批判している。
- 40) ローランド, C.G. *Jung and Literary Theory*, の第四章と五章を参照。また, Avril HornerとAngela Keane編, *Body Matters: Feminism, Textuality, Corporeality*, (Manchester: Manchester University Press, 2000) のなかのpp.244-53, 'Imaginal Bodies and Feminine Spirits: Performing Gender in Jungian Theory and Margaret Atwood's *Alias Grace*' を参照。
- 41) Robert Louis Stevenson, *The Strange Case of Dr Jekyll and Mr Hyde* (World Classics; Oxford University Press, 1998), Emily Bronte, *Wuthering Height* (London: Penguin Classics, 1985)。
- 42) ユングの幽霊の物語への筆者の注意を最初に向けてくれたスーザン・アチソン博士に謝意を表する。
- 43) Foreword to Moser, *On Spooks: Heresy or Truth?* を参照。
- 44) 同上, p.150.
- 45) 同上。
- 46) 同上, p.151

訳注

- [1] 本章はSusan Rowland (2002) *Jung A Feminist Revision*, Oxford: Polity Pressの6章、6章の注の後半の翻訳である。翻訳に当たっては著作権を有するPolity Press 社より許諾を得た。
- [2] 遂行態。言語学の用語。発言した時点でその動作を行ったのと同じ意味を持つ動詞から来ている。
- [3] 本部分の翻訳は以下の翻訳書に従った。[C. G. ユング著、池田紘一（訳）(2000/2011) 結合の神秘 錬金術に見られる心の諸対立の分離と結合Ⅱ, 人文書院, p.364]
- [4] 『ザ・ワイルド・ガール (*The Wild Girl*)』(1984)。は*The Secret Gospel of Mary Magdalene*としても知られているミシェル・ロバーツによる小説。フランス、プロバンス地方に伝わる五つのゴスペルから、イエス・キリストとマグダラのマリアの関係を扱っている。
- [5] 『イン・ザ・レッド・キッチン (*In the Red Kitchen*)』(1990)。はミシェル・ロバーツによる小説。ヴィクトリア朝時代の霊媒フローラ・ミルクを通して、何人かの女性の独白で構成されている。
- [6] ミシェル・ロバーツ。イギリスの小説家。1949年にカソリックの母親とプロテスタントの父親の間に出生。1992年に*Daughters of the House* (1992) でブッカー賞を受賞。初期には活発なフェミニスト、社会運動家でもあった。
- [7] 『またの名をグレイス (*Alias Grace*)』(1996) [マーガレット・アトウッド著、佐藤アヤ子（訳）またの名をグレイス（上）(2018) 岩波現代文庫, マーガレット・アトウッド著、佐藤アヤ子（訳）またの名をグレイス（下）(2018) 岩波現代文庫] マーガレット・アトウッドの小説。十九世紀にカナダで実際に起こった殺人事件を題材にその犯人とされる美貌の少女と架空の精神科医の関係を軸に扱った世界的ベストセラー。
- [8] マーガレット・アトウッド。1939年生まれのカナダを代表する小説家。60冊以上の著書を出版し、ブッカー賞を二度受賞している。日本でも多くの著書が紹介されている。七十年代にはフェミニズム運動の旗手としても活動した。
- [9] サイバーパンク (cyberpunk)。80年代に流行したSFの一分野。またそれらの運動・思想。
- [10] 本部分の翻訳は以下の翻訳書に従った。[C. G. ユング著、島津彬郎・松田誠思（編訳）「幽霊体験と心理学」, オカルトの心理学, (1989) サイマル出版会。P.102]
- [11] 本部分の翻訳は以下の翻訳書に従った。[C. G. ユング著、島津彬郎・松田誠思（編訳）「幽霊体験と心理学」, オカルトの心理学, (1989) サイマル出版会。P.102]
- [12] 参考文献、原注で取り上げられた文献で和訳されているものを [] に示した。